

小さな生き物

宿屋で腰を下ろして休んでいたバードの目の前に半分空いた戸から、黒い小さな生き物が飛び込んできた。

「オー、ブラックドッグ！」

しかし、この生き物は「ワン。ワン」とは吠えず、「ウー、ウー」とうなりながら、土間にちよこんと座ってみせた。

「犬ではないみたいですよ」



イトーが言いかけたとき、一人の婆さんが入ってきた。

「これ、これ三郎、黙って人の家に入るのはいけないよ」

婆さんはこの動物を抱き上げようとしたが、なかなか持ち上がらない。

「お前も大きくなったもんだなあ。もうわだしの手には負えなくなってきた。」

「この生き物は何ですか？」

「クマだよ、子熊」

「えー、クマ？」

「プリティ、ベアー」

「なんて言ってるんだい、このお方は？」

「かわいいクマだって」

「うんだうんだ、子熊はかわいいもんだ。大きくなったら怖いけどな。そろそろ山さ返さねばなんねな」

きぬよ婆さんは、山の上の小屋に住んでいるという。山のふもとの家には息子夫婦が住んでいるが、孫たちが手がかからなくなったのを機に、小屋に移ったという。雪の積もる冬にはさすがに息子夫婦の家に戻るが、春・夏・秋は小屋で一人暮らしをしている。

「もう、たくさん働いたから楽隠居だよ。じいさまもいなくなったし、飯豊山が良く見える小屋で一人で過ごすのが一番だ。もちろん、田植えや稲借りは手伝うし、山菜やキノコもたくさん採れる」

そんな山の小屋の軒下に、ある朝、この子熊が現れた。ぶるぶる震えながら、うずくまっている。

「かわいそうだな、と思ってゆんべな残しておいたメシをやったら、パクパク食ったもんだもの」

それから、子熊との暮らしが始まった。

「クマは人間と同じで雑食。おらが食うものは何でも食うんだ。大事なのは、毎日運動させること。そうでねえと、山さ帰ったら困るからね。運動といっても朝夕の散歩だ。犬みたいに、喜んで走ってぐよ。最近は走るのがはやくなってる。追いつけないときしょっちゅうだ。こっちもいい運動になる」

「なんで、三郎なんですか？」

「いい質問だね。おらには一郎と二郎という息子がいる。だから、三郎って名前にしたんだ。人間でなくてもめんごいもんだな」

「三郎が好きなフードは、なんですか」

バードが聞いた。

「なんととっても魚だね」

「こんなマウンテンでも魚がとれるんですか？」



「飯豊山から流れてくる玉川がある。雪解けになればマス、秋になれば

サケが海からのぼってくる。この近くに三平岩屋という洞窟があつてな。

その洞窟に、魚とりの名人三平が住んでいたから、そんな名前がついているんだ。三平岩屋の崖の下は深くて広い淵になっている。銚子口といってな、川の両側から突き出た岩が川を狭くして、滝のようになってる。そこには海から上がってきたマスや鮭もたくさんたまってるんだ。三平は、ヤスという小さなモリで道具で魚を突いてとる名人だったのよ。今でも、三平ほどではなくても魚とりのうまい男は結構いるし、一郎だつてたいしたもんだよ。この宿にも、魚はある。三郎が見てる方を見で。」

二人が、きぬよ婆さんの指差した天井に目を向けると、いろりの上に藁の固まりがぶら下がっていて、そこに魚の串刺しがたくさん刺さっている。

「あの魚は岩魚と言って、鱒やサケと違って海に戻らねえ。弁慶という藁の固まりに刺して、乾燥させてんだ。保存食だね。三郎は岩魚がうめえことをよく知ってるから、あっちばかり見てる」

「そういえば、会津から新潟に向かう途中、ボートをつないだ橋があったあのリバーは、イトーなんだっけ」



「阿賀野川でしょう」

「そうそうアガノ・リバー沿いの宿屋で食べた新鮮なサーモンはおいしかったわね。今まで、あんなにおいしいものは食べたことはなかったわ」

「ところで、このクマさん大きくなったら、どうするんですか」

「んだねえ。山に返さねばなんねべな。あんまり人になつくとマタギに取られてしまうと悪いから、早ければ早いほどええと思ってるんだ。今月いっぱいぐらい

かな。夏から秋にかけては山の食べ物もたくさんあるだろうから」

「マタギって何ですか」

イトーが聞いた。

「クマ撃ちだよ。クマをとって食うんだ。熊の胆といって、クマの胆のうは胃腸によく効く薬になるし、皮は立派な敷物になる。じいさまが敷いていたクマの毛皮はあつたくて、ノミもシラミも寄り付かなかったよ」

「クマの肉はおいしいですか」

「うん。好き嫌いはあるが、おらは好きだな。モツを焼いたり、骨付き肉を煮たしたら、最高だ。ここは玉川という川の名前と同じ村だとも、一番上流に小玉川という村があつてな、そこがマタギ部落となつている。飯豊山に住むクマをとつてるんだ」

「じゃあ、三郎君のお母さんも、撃たれてしまったのですね」

「いや、そんなことはねえ。マタギは子連れのカマを撃たないという厳しいきまりがあるから。だいたい、子熊が育たなかったら、クマはどんどん減ってしまうがらね。毎年撃つクマの数も決まつてるんだと。だから、クマが絶えてなくなることはない。クマは山の神様の贈り物だから大事にしねばなんね。したどもな、三郎、お前が大きくなつてあんまり人様をこわがらないと、マタギに撃たれてしまふのがおっかねえんだ」

そう言うと、きぬよ婆さんは三郎の頭をなでた。三郎は「クウーン、クウーン」と甘えるような声で鳴いた。

「そういえば、おら達が湯治に行く飯豊温泉もクマ捕りがみつけたんだと」

きぬよ婆さんは飯豊温泉の話始めた。

それはまだ鉄砲がないころの話。ある日、飯豊山に入った漁師が、突然背丈が4メートルもある白熊に出会った。はつと思つて、手にした弓で熊を射ようとし

だが、よく見ると、どこかに傷を負っているらしく、よたよたと歩いている。白熊が飯豊山の神の召使いだという話を思い出した漁師の弥助は、弓を引くのをやめて、逃がしてやることにした。さて、ふらついて歩く白熊はどこにいくのか不思議に思った弥助は、白熊の後をついていくことにした。しばらくすると、熊はごうごうと音を立てて流れ落ちる滝のあたりに入ってしまった。

弥助はその日は山を下りたが、白熊のことが気になって十日後に行ってみた。すると傷はだいぶ治ったらしく、川のあたりでうろろしていた。よく見ると、熊は滝のそばにある、淵に入っていた。そこからは、白い湯気のようなものが出ている。さらに十日後、訪ねてみると弥助の姿に驚いた白熊は、飛ぶようにして木立の中に逃げて行った。弥助が、白熊の出た淵に手を入れてみると、やはりお湯だった。小玉川の村人たちはそこに雪の降らない間だけ、宿を開き、温泉に入れるようにした。それが飯豊温泉の始まりとなった。

「お邪魔したの。それじゃおら山に帰ります。道中気をつけて行ってくださいね。三郎行くよ」

宿の人から、魚の切れ端をもらった三郎はムシヤムシヤ食べながら、きぬよ婆さんのあとを追いかけて行った。